

# 館蔵資料紹介 写真「陸軍少将時代の秋山好古」

徳永佳世 坂の上の雲ミュージアム学芸員



【資料サイズ】  
全体：縦 107mm × 横 66mm  
写真：縦 90mm × 横 58mm  
【表書】  
兄上様 好古 明治三十六年五月

本資料は、1903（明治36）年5月に秋山好古が次兄の岡正成に贈った写真である。

好古は義和団事件（北清事変）勃発後の明治33年7月、第五師団兵站監として清国（中国）入りし、翌34年10月からは清国駐屯軍司令官を務

め、35年6月に少将に昇任した。36年4月2日付で騎兵第一旅団長への転任辞令を受けた好古は、6月はじめころに帰京し、一家で旅団のある千葉県習志野へ転居した。

好古に代わって清国駐屯軍司令官となったのは、好古と同郷で陸軍大

学校同期の仙波太郎歩兵大佐であった。仙波の参謀総長あて明治36年5月24日付報告「五月上旬々報」（防衛省防衛研究所蔵、以下同じ）によると、仙波は5月9日着任、翌10日に清国直隸総督の袁世凱を訪問し、12日には好古とともに北京を訪れて種々の申送りを受けたようだ。

好古の日本への帰還は、ロシアと清国の密約情報に接したことによる対応や船便の都合により、幾度か遅れている。好古の4月30日付「四月中旬々報」では5月20日帰還予定、前掲「五月上旬々報」では5月24日の長門丸で出発予定とある。仙波の陸軍大臣あて5月24日付電報には、27日に長門丸で出発の予定、袁世凱の長男・袁克定も同行するはずとある。仙波の6月10日付「五月下旬々

報」では、好古が5月26日に長門丸で出発したこと、盛大な見送りの様子が次のように報告されている。「列国将校及清国官吏天津在留民ノ重立チタルモノハ皆停車場ニ送り其他英国ハ楽隊及歩兵五十人ハ、以、両国モ略全数及我邦ハ百名ヲ停車場ニ出シテ敬意ヲ表セリ」。天津港のひとつであった塘沽でも、清国兵は河岸に、アメリカ艦船の艦員は艦上に整列し、敬意を表して好古を見送ったという。長門丸は日本郵船所有の御用船で、神戸・大沽（塘沽の対岸）間を航行していた。3月に出された年間の発着予定表を見ると、大沽5月24日着、27日発、門司30日着発、宇品31日着発、神戸6月1日着とある。長門丸の出港が早まったか、仙波報告の誤記かは定かではないが、好古は辞令から約2ヵ月後の5月下旬にようやく帰国の途に就いたことがわかる。

この写真はいつ、どこで撮影されたのか。好古の足跡と台紙に刻まれた「比田勝写真館」の文字とを手がかりに調べたところ、『天津居留民

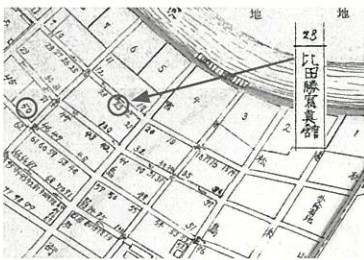


図1 「天津日本租界之図 明治三十九年五月」  
23が比田勝写真館、50が駐屯軍司令官々舎である。フランス租界との境界にあたる右端には、好古にちなんで名づけられた秋山街の文字がみえる。

第 西原道一の訃報を、6月に末弟・真之結婚の吉報に接するなど、悲喜両方を味わっている。道一の死は、五人兄弟はじめての悲報であった。真之の結婚については、次のような逸話がある。明治36年1月21日、好古は妻・多美あてに手紙を書き、外国文武官との社交上の理由で妻と長男を天津に呼び寄せた。手紙には、母親が見聞を広めるのは子どもの教育上最も必要なことであり、何も恐れずに来たらよいと記したあと、「留守は真之に托すも可なり、そうすると無余儀嫁を取るだろう」と加えた。好古も晩婚主義を貫いていたが、周囲の強い勧めで34歳のときに結婚し、二女一男に恵まれていた。結婚前も次兄の岡や真之と協力しながら、病気の長兄や老母の面倒をみてきたが、多美の存在は留守宅を預けられる安心感を好古に与えたのである。真之は、好古の帰京後まもなく結婚した。1年後、好古と真之は家族の支えのもと、日露戦争に出征する。